



●ポーラ美術館の COLORS 展

今回、色彩をテーマに様々な作品が展示されている COLORS 展を取上げてみます。

ポスト印象派では、「科学と象徴」というテーマで光の表現を追い求めた画家のジョルジュスーラの作品が多数展示されていました。

色彩の解説ではシュブールの同時対比の法則や、ニコラスルードの光の三原色 RGB は混ざり合うと視神経が刺激され白に見えたり、緑と赤を混ぜると原色よりも明るい黄色に見えてこの理論を加法混色として分解された色彩が、見る人の網膜上で直接的に混ぜ合わされる視覚混合という概念になり科学的理論を解説していました。

また、色彩は感覚で表現する「感覚と論理」というテーマの例では、マティスやカンディンスキーが取りあげられていました。

最後は草間弥生さんのカラフルな丸だけで作られた空間「無限の色彩」で、RGB の光の混色で色が作られる空間を体験して観るものに何を感じるのかというテーマで幕を閉じられていました。

カラーズの解説書には、色彩を解説するための図表なども多く取り入れられていました。

(幹事：田森恭子)

●続々「JIS Z8120 光学用語」から

b) 機器関係の、4) カメラ及び写真では、カメラ。写真レンズ、ピントガラス、露出計、被写界深度、解像力、カラー写真、色分解、露光など 37 目が定義されている。

5) 映画及びテレビジョンでは、撮影機、テレビカメラ、映写、スライド、映写機、ブラウン管、映画、テレビジョン、集光角、照射角、映写角、明澄度、解像度など 30 目が定義されている。

6) 光源及び検出器では、標準光源、白熱電球、アーク放電、キセノンランプ、水銀ランプ、ナトリウムランプ、蛍光ランプ、発光ダイオード、光電池、太陽電池など 43 目が定義されている。

7) 分光器では、分光計、モノクロメータ、分光器、など 8 項目が定義されている。

8) 測定器では、測光器、光沢度計、照度計、輝度計、比色計、色彩計、光高温計、屈折計、干渉計、光学距離計など 71 項目が定義されている。

9) 眼科及び医療機器では、眼用レンズ、眼鏡レンズ、コンタクトレンズ、アノマロスコープ、検眼鏡、眼底カメラ、レンズメータ、視野計、手術用顕微鏡、内視鏡など 22 項目が定義されている。

(永田泰弘)

●日本の伝統的な色名・紅

紅（べに・くれない）は、紅花の花から取る染料によって染めだされる極めて鮮やかな赤であり、国語辞典には「呉の藍」の音変化で「くれない」と出ている。三國志で登場する魏・呉・蜀の三国時代の「呉の国から渡来した藍」という意味であり、藍は、青だけでなく染料全体を指す言葉とも解釈される。

紅花はキク科ベニバナ属の一年草または越年草で、雅称を末摘花ともいう。

紅花のルーツを、呉から更にさかのぼると、シルクロードを通り、原産地はエジプトや地中海沿岸という。それほど紅の色は、太古から人々の憧れの色と考えられる。

紅花の色素は、口紅の原料としても使われ、江戸時代には、京都から上質な京紅として出荷されるようになった。

更に、江戸時代の後期になると、笹紅といって、見方により緑色に見える口紅の塗り方が、遊女などに流行したことが、浮世絵などに残っている。これは笹紅と言い墨で黒くした下唇に京紅を薄く何度も塗って、紅色の補色の緑色が、玉虫色のように輝く作用を利用したものと考えられる。紅花染料による高価な衣装は禁色や奢侈禁止令の対象となった年月も長く続いた。

(永田泰弘)